

古賀常次郎詳伝

佐保圭 著



古賀常次郎詳伝

どかんね

佐保圭著

[著者紹介]

佐保 圭（さほ・けい）

フリーライター。1964年6月、兵庫県生まれ。88年3月、早稲田大学第一文学部卒業後、数々の仕事に就き、93年2月、フリーライターとなる。「日経ビジネス」「日経エコロジー」（いずれも日経BP社）、「大人の科学」（学習研究社）などで執筆。企業経営や環境、サイエンスなど幅広い分野で活躍している。2010年8月、第17回『小学館ノンフィクション大賞』優秀賞を受賞。

どがんね——古賀常次郎詳伝

2010年12月13日	初版第1刷発行
2011年2月25日	第2版第1刷発行
2012年1月18日	第3版第1刷発行
2012年4月2日	第4版第1刷発行
2013年6月18日	第5版第1刷発行
2015年2月27日	第6版第1刷発行

著者 佐保 圭
発行者 戸田 雅博
発行 日経BPコンサルティング (<http://consult.nikkeibp.co.jp/>)
発売 日経BPマーケティング
〒108-8646 東京都港区白金1-17-3
[編集] TEL: 03-6811-8712 (日経BPコンサルティング 書籍編集部)
[販売] TEL: 03-6811-8200 (日経BPマーケティング)
<http://ec.nikkeibp.co.jp/>

撮 影 高口 裕次郎
装丁・本文デザイン 谷山 和代 (市川事務所)
印刷・製本 大日本印刷株式会社

© Kei Saho. 2010, Printed in Japan
ISBN978-4-901823-98-2 C0023

- 本書の無断複写複製（コピー）は、特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。
- 購入者以外の第三者による電子データ化、および電子書籍化はいかなる場合も認めておりません。
- 乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

序章——三つの人生……………5

第一章 誕生……………13

農家の次男に生まれる／父の帰国により、生活は一変する／鯉つかみとがめ突き／厳しかった父、優しかった母／読み書き、計算の遅れ／小学校の調理室でひと騒動／決して弱い者いじめはしない／発明家に憧れる／小学6年生で母を亡くす

第二章 非行……………37

不登校だった中学時代／喧嘩に明け暮れる日々を過ごす／長兄が家を出る／15歳で社会人になる／傷害事件で身柄を拘束される

第三章 更生……………71

更生し、リーダーとして活躍する／親和会を立ち上げる／転職した後、高校進学／定時制高校に通い始める／「四か年皆勤」を果たす／更生保護活動に取り組む

第四章 発明……………99

緩んだネジを見て、発明を思いつく／皿ビス用スプリングワッシャーを完成させる／発明家の誕生／佐賀の歴史／海外特許を取得する／第1回市村賞を受賞／政財官界に人脈が広がる

「コラム」佐賀の七賢人……………147

鍋島直正／大隈重信／副島種臣／江藤新平／島義勇／大木喬任／佐野常民

第五章 篤志……………153

ビルメンテナンスの事業を始める／更生保護活動に尽力する／保護司として活動する／父を亡くす

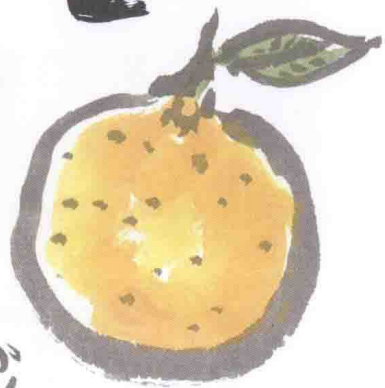
終章 忍耐と努力……………185

資料編 古賀常次郎の軌跡……………193

付録 インタビュー……………265

発刊によせて……………276

忍耐力
と
努力力



おれんじの
国産

序章——三つの人生……………5

第一章 誕生……………13

農家の次男に生まれる／父の帰国により、生活は一変する／鯉つかみとがめ突き／厳しかった父、優しかった母／読み書き、計算の遅れ／小学校の調理室でひと騒動／決して弱い者いじめはしない／発明家に憧れる／小学6年生で母を亡くす

第二章 非行……………37

不登校だった中学時代／喧嘩に明け暮れる日々を過ごす／長兄が家を出る／15歳で社会人になる／傷害事件で身柄を拘束される

第三章 更生……………71

更生し、リーダーとして活躍する／親和会を立ち上げる／転職した後、高校進学／定時制高校に通い始める／「四か年皆勤」を果たす／更生保護活動に取り組む

第四章 発明……………99

緩んだネジを見て、発明を思いつく／皿ビス用スプリングワッシャーを完成させる／発明家の誕生／佐賀の歴史／海外特許を取得する／第1回市村賞を受賞／政財官界に人脈が広がる

〔コラム〕佐賀の七賢人……………147

鍋島直正／大隈重信／副島種臣／江藤新平／島義勇／大木喬任／佐野常民

第五章 篤志……………153

ビルメンテナンスの事業を始める／更生保護活動に尽力する／保護司として活動する／父を亡くす

終章——忍耐と努力……………185

資料編——古賀常次郎の軌跡……………193

付録——インタビュー……………265

発刊によせて……………276

序章

三つの人生

71歳になる古賀常次郎には口癖がある。

「どがanne（どう?）」

あるいは、

「どがnnですか（どうですか?）」

古賀は、人から問われれば、これまで歩んできた道を包み隠さず語る。

その際、読み書きや計算ができないことも、幼い頃に父親からひどい折檻せっかんを受けたことも、10代は勉強もしないで喧嘩に明け暮れたことも、18歳で傷害事件を起こして少年鑑別所に入れられたことも、何もかも、包み隠さず語る。

そして、話し終えると、決まって「どがanne?」と尋ねてくる。

「どう?」と尋ねられても、こちらは、古賀の生き様のあまりの凄まじさに圧倒されてしまい、「はあ」とか「そうだったんですか」などと、意味のない言葉を返すくらいしかできない。

すると古賀は、苛烈な境遇にあった自分が、他人にはまねることのできない

忍耐と努力を一日も休まず続けることによって、発明家として名を残し、実業家として成功し、篤志家^{とくしか}として高く評価されたことに触れ、また「どがんね」と尋ねてくる。

尋ねられたほうは、もう言葉すら出ず、ただ黙ってうなずくだけである。

彼には3つの顔がある。

古賀常次郎は、日本の発明家[〃]である。

昭和42（1967）年、28歳のとき「段付皿ビスと皿ビス用スプリングワッシャー」を発明した。

これは、当時、絶対不可能と考えられていた「振動しても緩まない皿ビス^{ゆる}」を実現する画期的な発明で、第1回の市村賞など、数々の賞を受賞した。その革新性と実用性の高さは、のちに「古賀常次郎の発明した『緩まない皿ビス』のアイデアから発展させた技術がNASAに採用され、ロケットに乗って宇宙

に飛んだのではないか」とまで言われるようになったほどだった。

この発明により「古賀常次郎」の名は、インターネット時代のフリー百科事典「ウィキペディア」にも「日本の発明家」（総数64名、うち生存者12名…2010年8月現在）として紹介されている。

そのような事実を知らされれば、つい「レベルの高い大学教育を受けたのだろう」とか「設備の整った研究室にでも所属していたのだろう」などと思ってしまう。

ところが、現実には、まったく違った。

古賀は、幼い頃から、まともな教育を受けさせてもらえない家庭環境で育った。

中学校も3年間で200日足らずしか通っておらず、働きながら定時制高校を卒業したが、大学にはいっていない。

高学歴どころか、今に至るまで、読み書きや計算が大の苦手だという。

古賀常次郎は、日本の実業家である。

昭和43年、29歳のとき「古賀商事」を立ち上げた。

古賀商事は21年間（昭和61年から平成19年）、申告所得4000万円以上の優良法人として、法人所得の上位にその名を連ね続けた。そのような高い実績が評価され、「古賀常次郎」は、ウィキペディアで「日本の実業家」（全国総数3757名。佐賀県総数35名、うち生存者15名…2010年8月現在）としても紹介されている。

しかし、そこまで成功した実業家であるにもかかわらず、古賀は、ゴルフや釣りといった趣味も持たず、酒は一滴も飲まず、タバコも嗜^{たしな}まず、パチンコや麻雀などの賭け事は一切せず、女性が客を接待するような店には足も踏み入れない。

さらに、日常生活にはほとんどお金をかけず、自宅には「寝起き」するのに必要最低限のものしかなく、他人を招待する宴席は別として、ひとりでのる毎日の食事は500円にも満たないという質素な生活を続けている。

古賀常次郎は「日本の篤志家」である。

昭和40年に25歳で佐賀県地区BBS (Big Brothers and Sisters) 会の会員になって以来、33歳で財団法人佐賀県恒産会の理事、のちに理事長に就任し、43歳で保護司となるなど、更生保護活動において、さまざまな活動に取り組んできた。

そんな長年の更生保護活動の実績により、古賀は平成6（1994）年、藍綬褒章を受章した。

平成8年には紺綬褒章を受章し、以来、平成22年2月の21回目の同章受章は、佐賀県内最多を誇る。

古賀が今日までに行った寄付金の額は、5億5000万円を超えている。

世間には、古賀の受章を「金持ちの経営者が莫大な寄付で得た章だ」という悪意に満ちた見方をする人もいる。確かに、紺綬褒章は、公益のために私財（500万円以上）を寄付した者を対象としている。しかし、事業家にとって、汗水垂らして働いて得た命の次に大切な「お金」を寄付することは、賞賛され

こそすれ、何ら批判されるべき行為ではない。

しかも、古賀の場合、その寄付のすべてが古賀商事からではなく、個人としてなされてきたのである。何十年の間、まさしく爪に火をとすようにして蓄えられてきた古賀の個人資産のほとんどが、これらの寄付につき込まれたことになる。

そして何より、その評価が「寄付」だけによるものでないことは、平成21年、古賀が「旭日双光章」の受章で勲章を授かり、天皇后両陛下に拝謁したことからもわかる。

旭日章は、国家に対して功績のあつた男性に与えられるもので、たとえば内閣総理大臣などの職にあつて、顕著な功績を挙げた者を表彰する場合に授与される勲章である。

つまり、寄付の額が多ければ授与されるという章ではないのである。

現在、国家や社会から高く評価されている「篤志家」の古賀だが、驚くべきことに、今から50余年前までは、喧嘩に明け暮れ、やがて傷害事件で逮捕されて、

鑑別所に入ったこともある。札付きの不良[〃]だった。

なぜ、まともな教育を受けられなかった青年が『世紀の大発明』を成し遂げられたのか。

なぜ、ビジネスを成功させた「日本の実業家」が、極端なまでに質素な生活に甘んじているのか。

なぜ、鑑別所まで経験した不良が、「大勲章」を授かるほどの人物になれたのか。

それらの答えは、古賀常次郎の人生のなかにあった。